



姉弟相姦

わたしの

おとと

おれの

あな

わたしのおとうと

サンプル版

1

【わたしのおとうと】

『弟、健太……』

「あふう……はあふう……」

若干の寝不足感を感じながら、私は大きく身体を伸ばしながら、大きなあくびを口から漏らす。

「ありや……もう昼過ぎか……」

寝ぼけ眼で枕元の時計を見て時間を確かめる。少々古風な置時計の短針と長針は、それぞれにきと言つ数字とき式と言つ数字を指している。部屋の中が明るい事を考えれば、夜中の1時と言つ事はないだろうから、朝……と言つか真昼間の方の1時なんだろう。

思い出せば昨夜と言つべきか早朝と言つべきか、連休の初日と言つ事で、弟の健太の奴を無理やりに付きあわせて、夜遅くまで対戦のTVゲームで遊んだから……仕方ないか……

「ふああ……」

もう一度大あくびしながら、ちょっと考える……年頃の乙女としては、弟と徹夜でゲーム三昧と言つのは、多少悲しくない事もないが、楽しかったから好いか……そんな事をぼんやりと考えながら私は、ごそごそと起きる準備をし始めた。

半分寝ぼけながらも着替えを済ませ、階下のリビングに下りるとテーブルの上には紙切れが一枚……手にとって何が書かれているかを読む

わたしのおとうと



と、紙面にはこんな事が書かれていた。

『お姉ちゃんへ、サッカー部の練習に行つてきます。お姉ちゃんの朝飯は、僕が作った物の残りが冷蔵庫にあるので、レンジで温めてから食べるように、それとお味噌汁はお鍋にあるのでこれも温めてください……健太より』

ああ、そうだった……お父さんとお母さんは、昨日から商店街の福引で当たった温泉旅行へと出かけているんだっけ……

昨日の晩は、旅行に出かける前にお母さんが作り置きしていた晩御飯を食べたけど、今日の朝御飯は、健太の奴がわざわざ作ってくれたのか……

寝ぼけ眼のまま冷蔵庫を開けると、メモに書かれている通りにラップにくるまれた朝食が一式、きちんと置かれていた。

まだ完全に覚め切らない頭のまま、それをメモに書かれている通りにレンジで温め、同時にお鍋の味噌汁も温めると、漂ってきた良いにおいが、私を少しずつ目覚めさせて行つた。

「ん、美味しい！」

レンジで温めたおかず（卵焼きと鮭の切り身）と冷蔵庫から持ち出した佃煮とお漬物と焼き海苔と、同じく温めなおしたお味噌汁（ジャガイモとワカメの相性は最高だと思う）を、これまた健太が作り置きしてしてくれた塩おにぎりでパクつきながら、その絶妙な味付けを私は絶賛する。

「うん！ これなら健太の奴は、良いお婿さんになれるな」

三つ年下の弟である健太、さすが美人で優秀である私の弟だけあって、とても優秀な弟だ。勉強も出来て、所属しているサッカー部でもレギュラーで、次期部長との噂もあるらしい、顔の造形も私に似てなかなか

良い男っぷりをしており、その上に家事一般も上手ときては、非の打ち所の無い弟と言う奴だろう。

実際に弟という存在でなかったら、私がお嬢さんに貰ってあげるのだが……なんて事を考えたりした事もある。

まあ冗談はさて置いて、そんな優秀な弟なのだが……逆にそれが、ちよつとだけ引つかかる。

優秀すぎる弟……こちらで少しは、姉としての威厳を見せて置いた方が良いかも知れない……なんて事を考える。

わたしのおとうと

【 わたしのおとうと 】

『 写真…… 』

「この写真……」

それしか言えず、私は絶句したまま写真を見続ける。この様な写真を自分で写した記憶など当然の様に無い、よくよく見れば写真の中に映し出されている風景に微かな記憶がある……去年、家族旅行で出かけた温泉……その温泉にあった岩風呂が、この様な感じだった記憶がある。

「健太……この写真どうしたの、どうしてこんな写真を健太が持っているの……答えて、答えないと姉ちゃん本当に怒るわよ！」

強張っていた口を無理やりに動かし、ベッドへと上から覆いかぶさり押さえつけたままにしている健太の顔を睨みつけ、語気を荒くして問いただす。

「何とか言いなさいよ健太！ 何でお姉ちゃんこんな写真を持ってきているの、こんな……こんな厭らしい写真を、健太が撮ったの！」

隠し撮り……その言葉が頭の中に浮かんでくる。

家族旅行という事で一緒に行動していたのだ、私が温泉に入る時の姿を盗み撮りする機会があったら……だからと言って、なんでこんな写真を健太は撮ったのか……それを考えると、腹立たしくなってくる。「どうして横を向くのよ、私の目が見れないの……違うとか、誤解だとか……言い訳しなさいよ、言い訳してゴメンナサイで、謝りなさい健太、どうしちゃったのよ！」



何だか涙が出てくる。悔しいと言うか、悲しいと言うか……複雑な心境が、おなかの辺りから湧き上がってくる。

「健太、この写真を見ながら、何をしてたのよ！ お姉ちゃんに言えない事をしてたの、そんな厭らしい事におねえちゃんの写真を……こんな盗み撮りしたような、お姉ちゃんの裸の写真を見ながらしていたの！」

私の裸が写っている写真、この写真を見ながら健太が何をしたのか……考えたくない、でも考えてしまう。

「健太、どうしちゃったの……お姉ちゃんが嫌いな、健太何とか言つてよ！」

涙をポロポロと溢れ出させてしまう……涙を溢れ出させながら、私は押さえ込んだままの健太をにらみ続ける。

「健太のばかあ！」

何時の間にか、私は健太の顔を叩いていた……視線をずらし横を向いたままだった健太の顔が、さらに問いただし、顔を叩き続ける私の方へと、ゆっくり向けられる……そして次の瞬間……

「きゃあー！」

突然に健太はベッドから起き上がると、私の手を掴んで逆に私をベッドの上へと押し倒す。

「いたあ……なにするのよ健太、退きなさいよ、手を離しなさい！ 健太、早くどきなさいよ、もう健太になんか触れて欲しくないわよ！ 健太どきなさいよ、どけてったら！」

上から私を押さえつける健太……その顔を見た瞬間、私は凍りつく……私を押さえつけ、見下ろしている健太の顔は、今までに一度も見た事の無い……鬼のような表情だった。

「な、なによ！ その顔は何のよ健太、そんな顔してもお姉ちゃんは怖くないわよ、だからどきなさいよ健太、聞こえないの……健太……どい

てよ……」

私を見つめる健太の顔が怖かった。

「どきなさい、どいて……お願いだから健太、やめて……健太……おねがい、やめて……」

何をやめると言っているのか、自分の声が震えているのが解る……既に健太は私の弟ではなく、一匹の獣である事に、男と言う名の獣に変わってしまった事を私はさとってしまった。

「やあ、やめてえ、健太おねがい、おねがいだからいやあ……！」

更に強い力でベッドに押し倒され組み伏せられる。

わたしのおとうと

【わたしのおとうと】

『淫愛』

「どうして……どうして私が、こんな目に合わなければならぬの、何か私が健太に悪い事でもしたの？ それだったら、お姉ちゃん謝るわよでも……でも……でも、こんな酷い目に合うような事を私がしたの、教えてよ健太！ 早く教えなさいよえ！」

全ての事が終わった後……私は、健太に犯された姿のままベッドに突っ伏して泣き続ける……捲り上げられたままのセーター、そのセーターから露出している乳房を隠す役目を放棄している外れているブラジャー、引き摺り下ろされたショーツは左足首に纏わり着いたまま……そんな姿で、私は泣きながら健太に問い続ける……どうして！ なぜなの！ 教えて！ ……と、私は知りたかった……どうして健太が、私にこんな事をしたのか、健太の本心を知りたかった……たとえどの様な答であつたとしても……そんな私の問いに対する健太の返事は……

「やめて、私に触れないでえ……触れただけで寒気がするわ、私に触れないでえ！」

私の肩に健太の手が掛かる……慰めるつもりとでも言うのだろうか？

「触れないでって言ったでしょう！ なにを……これ以上なにをしようというの健太、もうしたんでしょう、終わっただけでしょう、だから満



わたしのおとうと

足したんでしよう、だったら私に構わ……いやあ、なにを、健太やめてえ！」

それは違った……泣きながら突っ伏している私を、健太は強引に引き起こす……そして再びベッドの上へと押し倒した。

「やあ、やめてえ、これ以上なにを……もう終わったんでしよう、だめえ、いやああ、もういやああ　！」

セーターを完全に脱がされる。そしてずり上がったままのブラジャーから露出している乳房を再び揉まれる。

先程と同じ行為が、いいえ……いつそう激しい行為が私に対して繰り返し行われる……

「やああ、やめてよお、健太……おねがいだから、おねがいだから……もうやめてええ……」

私は悲鳴を……やめてと健太に懇願し続ける……しかし健太は、私を犯す事をやめようとはしない……

「あつ、ああああ……だめえ……もう、いやあよお……」
私の両足の間に、健太の下半身が再び分け入ってくる。

「あうう！」

最初の陵辱より、健太が吐き出した精液によつてぬるぬるとなっていた私のアソコ……ズルリと、スムーズに健太のモノを受け入れてしまう。

「いやああ……やめて、健太……おねが……いだから、わたしたちは……」

私の呻く様な声……それが健太の耳に届いているのか、私には解らなくなっていた……

「あふうっ！」

健太の舌が私の胸に触れ、既に勃起している乳首を舐め吸う……
「あううう、だめえ……そんなことしちゃ、だめええ……おねがい、だ

わたしのおとうと

からあああつ！」

健太の身体が私の身体を犯し続ける……その激しい行為を、私は何時しか受け入れ始めていた。

わたしのおとうと